

琉球新報

THE RYUKYU SHIMPO

第38531号

発行所 琉球新報社
〒900-8525那覇市天久905番地
電話 098(865)5111
©琉球新報社2016年

飛行場跡にダイオキシン

読谷 原因不明、2年放置

【読谷】読谷村の米軍読谷補助飛行場跡地で、2014年に基準値の8倍以上のダイオキシン類や鉛が検出されたにもかかわらず、2年以上にわたり処理されず、汚染土壌や廃棄物が埋め戻された状態が続いていることが24日までに分かった。有毒物質が検出された一帯は返還前からフェンスがなく、自由に入りできたため汚染原因が米軍側にあるのかどうかは不明。県、読谷村、沖縄総合事務局、沖縄防衛局の間で原状回復の責任の所在が曖昧になっている。汚染原因がはっきりしない場合どこが処理するのか明確になっておらず、基地返還後の浄化責任について新たな課題が浮かび上がっている。(23面に関連)

基準の8倍、鉛も21倍

環境問題の調査団体「インフォームド・パブリック・プロジェクト(IPP)」の河村雅美代表の県への情報公開請求により、明らかになった。最大で、土壌から毒性等量(TEQ)1㌦当たり8300㌦のダイオキシン類や、基準値の21倍以上となる1㌦当たり3200㌦の鉛が検出されていた。



【用語】 読谷補助飛行場跡 戦時中に旧日本軍が土地を接収し北飛行場を建設。戦後は米軍が読谷補助飛行場として使った。2006年12月に約191㌦が全面返還され、嘉手納弾薬庫の村有地との等価交換で村は国から飛行場跡地を取得した。県営畑地帯総合整備事業で整備された後、旧地主らでつくる農業生産法人に村が土地を貸し付ける。跡地利用計画に基づき、将来的に法人に土地を払い下げる予定だ。

地改良事業やかんがい排水事業などが進んでいる。

検出されたTEQ1㌦当たりのダイオキシン類は、8300、2400、6600、1100㌦で、1000㌦以下とされる基準値を全地点で上回った。また検出された鉛は1㌦当たり3200、1300、2000、460㌦。基準値150㌦以下をいずれも大幅に超えている。

読谷村の石嶺伝実村長は「関係機関と善処策を相談している。元は米軍基地だったので国の責任で原状回復してほしい」と主張している。24日時点で、沖縄防衛局からの琉球新報の取材に対する回答はない。河村代表は「沖縄市のサッカー場のダイオキシン問題で全面調査が開始された後なのに、なぜ県は追加調査をしなかったのか。すぐに一般市民向けに情報を公開しなかったことも問題だ」と指摘した。(清水柚里)